種の浜

要旨

ますほの小貝を拾うために種の浜に舟で向かった。たどり着いた浜には、粗末な漁師の小家と法花寺があった。そこで茶や酒を飲みながら過ごす夕暮れの寂しさに大いに感動して、二首の句を詠んだ。そしてその日のあらましは等栽に書かせて寺に残す。

構成

段落	ページ・行	段意
第一	初め～P一〇六・4（吹き着きぬ。）	ますほの小貝を拾うために、種の浜に舟を走らせた。天屋なにがしという者は食事や酒を用意させ、従者を多く舟に乗せて向かう。追い風を受けて、すぐに到着した。
第二	P一〇六・5（浜は僅かなる）～P一〇六・8（萩の塵）	浜には粗末な漁師の小家とわびしい法花寺があった。そこで茶や酒を飲みながら迎えた夕暮れの寂しさは非常に感動的であった。そこで二首の句を詠んだ。
第三	P一〇六・9（その日のあらまし、）～終わり	その日のあらましは等栽に書かせて寺に残す。

品詞分解と現代語訳

（表示は略号で示した。略号については略号一覧参照。）

①十六日、空 霽れ たれ ば、 ますほ の 小貝 拾は ん と、
（じふろくにち／そら／は／ラ下二・用／完・已／接助・順理／格助・体修／こがひ／ひろ／八四・未／意・終／格助・引用）

種の浜 に 舟 を 走す。 ②海上 七里 あり。 ③天屋なにがし と いふ 者、 破籠・小竹筒 など 細やかに したため させ、 僕 あまた 舟 に 取り乗せ て、 追ひ風 ときの 間に 吹き着き ぬ。
（いろ／はま／格助・帰着／ふね／格助・対象／サ下二・終／かいじやう／しちり／ラ変・終／てんや／格助・引用／しもべ／使・用／格助・時／格助・引用／ものわりご／ささえ／副助・例示／こまか／形動ナリ・用／マ下二・未／使・用／おかぜ／格助・体修／ま／格助・体修／ふき／カ四・用／つき／完・終）

④浜 は 僅かなる 海人 の 小家 にて、 侘しき 法花寺 あり。
（はま／係助・提示／わづか／形動ナリ・体／あま／格助・体修／こいへ／格助・状態／わび／形シク・体／ほつけでら／ラ変・終）

⑤ここ に 茶 を 飲み、 酒 を 温め て、 夕暮れ の 寂しさ、 感に 堪へ たり。
（代／格助・場所／ちや／格助・対象／マ四・用／さけ／格助・対象／あたたむ／マ下二・用／接助・単接／ゆふぐれ／格助・体修／さびし／格助・対象／かん／八下二・用／た／完・終）

⑥寂しさ や 須磨 に かち たる 浜 の 秋 の 塵
（さびし／間助・詠嘆／すま／格助・対象／タ四・用／完・体／格助・体修／あき／格助・体修／ちり）

⑦波 の 間 や 小貝 に まじる 萩 の 塵
（なみ／格助・体修／ま／間助・詠嘆／こがひ／格助・対象／ラ四・体／はぎ／格助・体修／ちり）

⑧その 日 の あらまし、 等栽 に 筆 を 取ら せ
（代／格助・体修／ひ／格助・体修／とうさい／格助・対象／ふで／格助・対象／と／ラ四・未／使・用）

①（八月）十六日、空が晴れたので、ますほの小貝を拾おうと、種の浜に舟を走らせる。②海上（の距離）は七里である。③天屋なにがしという者が、割籠（に入れた弁当）と小竹筒（に入れた酒）などをこまごまと用意させ、従者を大勢、舟に乗せて、追い風を受けて、ほんのわずかな時間で（浜に）吹き寄せられて着いた。

④浜には粗末な漁師の小さな家があり、わびしい法華宗の寺（本隆寺）がある。⑤ここで茶を飲み、酒を温めて（飲み）、（時間を過ごして迎えた）夕暮れの寂しさは、非常に感動的であった。

⑥寂しいことだ、（『源氏物語』に書かれている）須磨（の秋）にまさる（この）浜の秋は。

⑦（色の浜に寄せる）波の間に、小さな貝にまじって、萩の花の塵（散った花びら）がある。

⑧その日の（行楽の）あらましを、等栽に書かせて、寺（本隆寺）に残す。

て　接助・単接
寺（てら）に　格助・場所
残（のこ）す。　サ四・終

学習活動のポイント

■ 導入

学習活動のポイント

❶ 西行や「山家集」と芭蕉との関係、「源氏物語」の概要について学ぶ。知技(1)ア

❶詩歌編の西行の歌（二六四ページ）なども参考にしながら、芭蕉の発句や紀行文に西行の「山家集」からの影響があることをつかませたい。「源氏物語」については、「種の浜」の文中に須磨巻の一節が踏まえられていることが押さえられればよい。

【評価】 言葉には、文化の継承、発展、創造を支える働きがあることを理解しているか、確認する。

■ 展開

学習活動のポイント

❶「種の浜」を音読する。思判表B(1)ア

❷ 作者が種の浜に行った目的について読み取らせる。知技(1)エ 思判表B(1)エ

❸「寂しさや」の句に込められた作者の心情を理解する。思判表B(1)イ →**「学習のポイント」1**

❹「波の間や」の句に込められた表現の工夫、効果について話し合う。知技(1)ウ・(2)ウエ →**「言葉と表現」1**

❶情景を味わいながら音読させる。

【評価】 俳文の文体の特徴を踏まえて、内容や構成、展開などについて叙述を基に的確に捉えているか、授業中に指名して音読させることにより、確認する。

❷本文中から該当箇所を指摘させる。「ますほの小貝を拾はんと」（一〇六・2）と冒頭に示されているので該当箇所はすぐに見つけられるだろう。導入の西行「山家集」との関連をふまえて、「ますほの小貝を拾」うことが作者にとってどのような意味を持つのかを理解させたい。

【評価】 文章の意味は、文脈の中で形成されることを理解しているか、ペーパーテストにより、確認する。

・本文中のどのような表現に作者の気持ちが表れているかについて、作品や文章の成立した背景や他の作品などとの関係を踏まえ、内容の解釈を深めているか、教室で指摘させ、段落ごとの作者の思いを五〇字程度の文章にまとめさせることにより、確認する。

❸教科書の脚注に示した西行の和歌や「源氏物語」の引用部分を参考に、句が詠まれた背景にある文学作品について理解させる。

【評価】季語がもたらす意味合いをつかみ、発句に込められた作者の心情について、作品や文章に表れているものの見方、感じ方、考え方を捉え、内容を解釈しているか、句の鑑賞文を一〇〇字〜二〇〇字程度の鑑賞文にまとめさせ、提出させることにより、確認する。

❹句に表れる色彩感覚や情景について想像させ、解釈を深める。

【評価】我が国の言語文化に特徴的な語句の量を増し、それらの文化的背景について理解を深め、語感を磨き語彙を豊かにしているか、ペーパーテストにより、確認する。

・古典の世界に親しむために、古典を読むために必要な文語のきまりや、古典特有の表現などについて理解しているか、ペーパーテストにより、確認する。

・時間の経過による文字や言葉の変化について理解を深め、古典の言葉と現代の言葉とのつながりについて理解しているか、授業中の質問により、確認する。

■ まとめと発展

学習活動のポイント

❶作者が「ますほの小貝」を拾おうとした理由について話し合わせる。主態　→「言語活動」1

❶作者にとって「ますほの小貝」を拾うことがどのような意味を持つのかを話し合わせることで、作者の「おくのほそ道」の旅の目的について理解を深める。

【評価】進んで人生と旅についての作者の考えを理解し、俳諧の修辞や古典を踏まえた表現など、作者の工夫を読み味わい、学習課題に沿って、作者が「ますほの小貝」を拾おうとした理由について話し合おうとしているか、分析する。

指導上の注意点と発問例

● 一〇六ページ

問 **「追ひ風ときの間に吹き着きぬ。」（4行目）とは、どのような状況か。**

答 芭蕉たちの乗った船が追い風を受けて、短時間で浜に着いた。

問 **「僅かなる海人の小家」（5行目）とはどのようなものか。**

答 漁師の住む粗末な小さい家。

問 **「夕暮の寂しさ、感に堪えたり。」（6行目）とあるが、その情景が具体的に述べられている箇所を抜き出せ。**

答 「浜は僅かなる海人の小家にて、侘しき法花寺あり。」（5行目）。

問 **「感に堪えたり。」（6行目）とは、どのような意味か。**

答 非常に感動すること。

問 **「寂しさや」（7行目）と「波の間や」（8行目）のそれぞれの句の季語と季節を答えよ。**

答 寂しさや…季語＝秋　季節＝秋
波の間や…季語＝萩　季節＝秋

補 「語句の研究」参照。

問 **「波の間や」（8行目）の句の「萩の塵」とは、何か。**

答 萩の花

語句の研究

● 一〇六ページ

2十六日　旧暦の八月十六日。季節は秋である。

2ますほの小貝　「ますほ」は「ますお」と発音。西行の和歌に「汐染むるますほの小貝拾ふとて色の浜とはいふにやあるらむ」とある（『山家集』）。芭蕉がますほの小貝を拾おうと種の浜を訪れたのは、この和歌が念頭にあったからであろう。

2種の浜　現在の福井県敦賀市色浜。敦賀半島の北東部にあり、敦賀湾に面した浜。「色浜」「種浜」の二つの表記があるが、現代の辞書等では「色浜」で立項される。

2海上七里あり　「曽良旅日記」には「海上四リ」とある。

3天屋なにがし　天屋五郎右衛門。敦賀の廻船問屋。室氏。俳号は玄流。「曽良旅日記」の八月十一日の条に「天や五郎右衛門」の名が見える。

3破籠　檜の白木で作られた折箱で、内側に仕切りがあり、ふたをかぶせて使う弁当箱。

3小竹筒　酒を入れる携帯用の竹筒。

4追ひ風ときの間に……　「ときの間」は時の間。舟に乗り、追い風を受けて短時間で浜辺に着いたことを、『源氏物語』の須磨巻で描かれた情景に重ねて表現している。この後の発句「寂しさや須磨にかちたる浜の秋」も『源氏物語』の須磨の浜辺を念頭において詠んでいる。

5法花寺　日蓮宗の寺、本隆寺のこと。

7須磨　『源氏物語』須磨巻に「須磨は、いとど心づくしの秋風に、海はすこし遠けれど、行平の中納言の、「関吹き越ゆる」と言ひけむ浦波、よるよるは、げに、いと近う聞えて、またなくあはれなるものは、かかる所の秋なりけり」とある。芭蕉はこれをふまえながら、秋の種の浜の「寂しさ」は須磨に「かちたる」（まさる）と詠んだ。

8波の間……　本隆寺に所蔵される「越前ふくゐ洞哉書」の懐紙（後掲「寺に残す」参照）に桃青（芭蕉）詠の「小萩ちれますほの小貝小盃」が記されている。「波の間や小貝にまじる萩の塵」はこの句の改案であるとする説と、二つの句を別の作品とする説とがあるが、ここでは前者の説に従った。「萩の塵」は萩の花が散った花びら。花屑。

9等栽　福井の俳人。生没年未詳。洞哉とも書く。

9寺に残す　本隆寺所蔵の懐紙に「気比の海　国の序、このはまにまうで侍る。同じ舟に　青／小萩ちれますほの小貝小盃／元禄二仲のけしきめで、いろの浜の色に移りて、　さそはれて、小貝を拾ひ、袂につゝみ、盃　秋」とある。「西上人」「彼上人」は西行のますほの小貝とよみ侍しは、西上人の形見　にうち入なんどして、彼上人のむかしをも　こと。成けらし。（中略）此たび武江芭蕉桃青巡　てはやす事になむ／越前ふくゐ洞哉書／桃

鑑賞

「種の浜」は、大きく二つの古典と響き合っている。ひとつは中世の和歌であり、もうひとつは『源氏物語』である。

まず、種の浜へ行ってますほの小貝を拾うという発想そのものが、西行の和歌「汐染むるますほの小貝拾ふとて色の浜とはいふにやあるらむ」に触発されたものだったと考えられる。

「天屋なにがしといふ者……僕あまた舟に取り乗せて」とあるように、種の浜への船旅には多くの従者が同行し、飲食物も十分に用意されていた。そのように実際には賑やかで贅沢な行楽であったと考えられるが、芭蕉はあくまで、種の浜の風景にわびしさと寂しさを見いだすことに集中している。貧弱な小さな家とわびしい寺ばかりがある浜辺で、小さな美しい貝を拾い、茶や酒を飲む。夕暮れになり、寂しさに心を動かされる。芭蕉のそうした心情の背景には、秋の夕暮れの寂しさを詠んだ『新古今和歌集』の三夕の歌、例えば藤原定家の「見渡せば花も紅葉もなかりけり浦の苫屋の秋の夕暮れ」（二六三ページ参照）などへの連想もあったのではなかろうか。

そして「追ひ風ときの間に…」の記述が『源氏物語』の須磨巻の表現をふまえていることから、芭蕉のなかには、目前にある秋の種の浜と、『源氏物語』で表現された秋の須磨とを対比する発想もあったと考えられる。それが「寂しさや」の句に端的に表れていると言えよう。

本隆寺所蔵の懐紙には、芭蕉と同行の人々が浜で小貝を拾い、酒を飲む盃にその貝を入れて興じていた様子が記されている（語句の研究「寺に残す」参照）。この懐紙の句「小萩ちれますほの小貝小盃」は、「小萩」「小貝」「小盃」と、小さく美しいものを連ねており、楽しげな酒宴の様子が想像される。これに対し、「種の浜」に記された「波の間や小貝にまじる萩の塵」の句は、浜に打ち寄せる波のあいだに貝と花屑が見えるという客観的な風景描写の句になっている。小貝と萩の花という句材は共通しているが、「小萩ちれ」の句がいわば動的であるのに対し、「波の間や」の句は静的である。ここにもまた、種の浜をわびしく寂しい場所として描こうとする指向があらわれていると言えよう。